巻頭言

難治性心不全に対する心臓移植と日本人の臓器移植感

森下靖雄*

心臓移植が修復不能ないし回復不能の難治性心不全患者に対する最終的治療手段として確立されて久しい．しかし，心臓移植が今日のような普遍的な治療手段になるまでには多くの難問に直面し，それを乗り越えなければならなかった．1967年12月，Barnard による同種同所性心臓移植の臨床第1例目施行後，翌年には100例もの心臓移植臨床例が行われた．しかし，2年後の1969年には多くの施設が移植後の拒絶反応，患者の精神的不安定，訴訟問題などのため，心臓移植手術を中止している．辛うじて Shumway 率いる Stanford 大学のみが年間20例の心臓移植を継続する状態であったが，1980年になりシクロスポリンが臨床へ導入され様子は一変した．どの施設でも安定した成績が得られるようになり，心臓移植を行う施設は漸次増加し，1994年末までの心臓移植の総数は3万例を超えるところまできている．更に待機中のレシピエントで重症心不全が増悪した場合，補助心臓や完全置換型人工心臓を装着し，その間にドナーを待って bridge transplantation も行われるようになっている．

このようにして，症状が殆どコントロール出来ない難治性心不全患者を抱えている医師にとって魅力的な治療法になってきている心臓移植が未だに行われてないのが我が国である．今日，“先進国”と言われる国々はもちろんのこと，多くのアジア諸国でも心臓移植が行われる中，何故に我が国でのみ行われないのであろうか．心臓移植を実施する前提として，生きて拍動している心臓，つまり beating heart の存在が不可欠で，心臓死より前のいわゆる脳死の段階で心臓を摘出しなければならない．この“生きた心臓，死んだ脳”という新しい死の判定をめぐって，宗教界や言論界をまじえて広範な議論が展開されている．その過程で，脳死を死の判定基準として法的に採用した国も少なくない．我が国では，1968年に札幌で行われた心臓移植が死の判定をめぐって論議を呼び，それ以来脳死についての結論は未だ得られてなく，そのことが大きな隘路になって心臓移植はとだえたままである．

他人の臓器を貰ってまで生長らえることに対する日本人の生命への倫理観のようなものが，この方面の進歩・発展を大きく遅らせている1つの理由であろうか．日本人の死生観，遺体に対する感情は複雑で，脳死を死とすることに割切れない感情をもつ人が多いことも事実だ．この感情は日本人に限らず，欧米人でも同じではないか．彼等は「助かるはずの患者を見殺しにしていいはずがない．」という純粋な気持ちから移植外科を押し進めているにすぎないのではないか．そこに我彼の民族による違いが本当に存在するのであろうか．

外国に行く毎に言われることがある．「なぜ日本では臓器移植が行われないのか」「臓器移植を妨げているのは，宗教上の問題なのか．」とも聞かれる．日本人は祖先をうやまう気持ちの極めて強い民族ではあるが，そのことと宗教心とは別のように思われる．話は変わるが，欧米，特に米国に2年間住んで思ったことは，彼等の世界でボランティア精神の何と旺盛なことか．ボランティア活動を通して他人に尽くし，他人を救うために自己又は家族の臓器を提供する．そうすることで良き来世を夢見るのではないか．来世を信じるというか，宗教心の強いのは，かえって欧米人ではあるまいか．逆に日本人の場合，犠牲的精神の欠如，来世など信じない宗教心の欠如が，臓器移植に対する消極的な姿勢として反映しているのではない

*群馬大学医学部第二外科

Presented by Medical*Online

か．日本人の根底のあるのは，昨今の欧米との経済摩擦でもわかるように，与えるのは嫌だが，他人や他国からいただくものはきっちりいただくという精神のみが強いといえば言いすぎであろうか．

脳死に賛成，反対の両論があって当たり前である．しかし，賛成者，反対者はお互いに干渉しないことである．移植を必要とする患者，脳死からの臓器提供に同意した本人，家族，それに臓器売買を厳しく禁じている日本移植学会の倫理宣言に従い移植を行おうとする医師の三者が納得，合意するなら，第三者はこれを妨害することはないはずである．脳死，移植に反対する人は，臓器を提供しない自由を有するわけであるから，また，医師への不信感を抱く人は，自分が「脳死を判定されることに拒否する」と生前に家族，そして個人的に宣言すればよい．個人の意見を一般化し，他人の脳死判定までも反対するなど，全くナンセンスとしか言い様がない．

結論として，欧米との臓器移植に対する落差は，議論以前の，「個人と全体の境界をあいまいなムードで包み，自己の見解をきちんと表明しない」という日本的雰囲気に根ざすものと言わざるを得ない．日本人は emotional な国民とも言われている．何かのきっかけで臓器移植が再開され，それが軌道に乗るや当たり前の顔で受けとめる時代も意外に早く来るのではなかろうか．

Presented by Medical*Online